

人間環境実践知の構築：人間と環境に働きかける技法と専門知の「あいだ」を考える

野々村， 淑子
九州大学大学院人間環境学研究院（教育文化史）

<https://doi.org/10.15017/1905541>

出版情報：教育基礎学研究. 8, pp.71-83, 2011-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

人間環境実践知の構築

～人間と環境に働きかける技法と専門知の「あいだ」を考える～

野々村 淑 子

I. 脚 本

1) 知の共同体づくり

九州大学に人間環境学研究科（その後研究院・学府となる）が誕生して10年余りが経過した。人間環境学研究院・学府は、文理融合型の学際的研究組織としてどのような知を生みだしてきたのか。そしてこれから生みだしうるのか。既存の学問と学問が出会い、融合するとはどのようなことを意味するのか。

私たちのグループ（前期）は、人間環境学の枠組をまず大きく人間と環境との関係に関わる学問ととらえ、そのなかで諸学問（授業連携した共生社会学、地域福祉社会学、文化人類学、コミュニティ計画学、社会教育学、教育文化史）はどのように位置づけるのか、それらの関係性はいかにあるのか、その融合の可能性はいかにあるのか、ということを考えていくことにした。ある共通のトピックに対して自分の専門的知見から、あるいはそれを越えた関心や課題から、さまざまな見解を議論し合い、そのトピックの持ちうる研究課題を練り上げていく（ときには崩してみる）場のないところでは、並列的な学際はあるとしても、融合は生まれない。しかし、そうした場づくりこそが実は難しい。

本取組は、そうした意味で恵まれた土壌があった。昨年（平成22年度）の萌芽的学際研究『『動的指導体制』に基づく学際研究ネットワーク創りの試み』のメンバー（飯嶋、菊地、南、柴田、野々村）が核となり、今回のプロジェクトが可能となったわけだが、そもそもこのグループの誕生は、南、菊地、飯嶋、柴田のあいだの茶話会から始まっている。つまり学問分野を超えた、お茶菓子やピザをはさんだ語り合いの場がソフトな形で繋がり、継続され、昨年プロジェクトに結びついたわけである。昨年参加させていただくようになった野々村は、そこにある「知の歓び」「知の共同体」に、修士課程進学を志した頃に参加し始めた研究会で味わった興奮を久しぶりに味わった気がしたのである。そこには複数の研究者が集い、自分の研究方法論や社会観、人間観を展開し、対立はあるが認め合い、真実の追究という点において共通の目標を見据えている（敬称略、以下適宜同様）。

多分野連携の一環としてこのプロジェクトを考え、グループの皆さんに協力をいただくよう決心したのは、そのようなきっかけを大学院生（まずは自分の授業の受講生たち）にも持ってもらいたいと思ったというのが初発の願いである。結果として、他の研究者、

他の専門科目の意見に触れ、触発され、自分の思考の枠組を揺さぶられ、自らの課題に向かい直すエネルギーに転換できたのではないか。もちろん、研究会ではあまり自分の意見を展開できなかったかもしれない。レジュメで論じたことすべてを議論しきれなかった。それは時間不足のためもあったと思う。大切な点だと思いながらも、司会としても言及できないでそのままになってしまった論点がたくさんあった。しかし、まさに今動いている学問の先端の議論に学会シンポジウムで触れ、それに対する議論に参加した経験を、今後の自らの研究活動のみならず、知の共同体の担い手となっていく糧としてもらいたい。これが、このプロジェクトの当初の目的の一点目であった。

2) 実践知の構築

研究は何のためにあるのか。自分は何のために研究するのか。何を明らかにするために、その方法論を用いるのか。その方法でなければ解くことのできない問題とは何か。このプロジェクトを「人間環境実践知の構築～人間と環境に働きかける技法と専門知の「あいだ」を考える～」のテーマを中心に据えようと考えたのは、研究者が独立して研究を行っていくときに必ず問われるであろう、それらの問いを、学生さんたちに常に自らに対して発し続けてほしいと考えたからである（もちろん、私自身も含めての課題である）。これが本プロジェクトの目的の二点目である。

現代社会の課題、社会のニーズというのは、研究が実践に応用される時にしばしば語られるフレーズである。しかし、何を社会の課題とし、ニーズとするのか、については、研究分野の手法、調査や分析の手続きや論証過程、またそのパラダイム（認識の枠組）に依るところが大きい。それはもちろん、それぞれの学問の発展史のなかで練り上げられてきたものあり、それらを理解した上でないとなかなか順当な議論はできない。

しかし、そのような研究の蓄積や、議論に求められる緻密さとは別個に、常に社会の現実はある、それへの対応を求められていることは事実である。社会の様々な課題に応じていくこと、即ち実践に関与することは重要なことであるし、そもそもほとんどの学問は実践知の構築をその目標としている（いかに生きるか、ということ自体への問いも含めて、である）。とりわけて（かどうかは断言できないが）、私自身の専攻分野である教育史、また近接領域である教育思想史、教育哲学の分野においては、教育改革論、制度や政策論争への理論的足場が求められている。それも、「教育学」というディシプリンを見据え、またそれを超えた広い視野での考察が喫緊とされている。

ここ10数年の教育改革では、前述したとおり、教育学とは無縁なところから改革論が出され、教育の中に新たな問題を生んできている。私は、そうした改革論に問題を感じるので抵抗しているのだが、ちまちましたデータをいじって塹壕戦をやっているときに、後方から弾薬の補給がない、という状態を感じ続けている。教育学

も教育の現実も知らない人たちの乱暴な改革論と闘っているときに、その闘いを支えてくれる理論的なサポートが不足しているのである。「教育関係論なんかをいじっていないで、制度や政策の論争に足場を与えてくれる研究を出してくれ」という思いを強く感じている。…狭義の「教育的思惟」に対する反省に加えて、広義の「教育的思惟」に対する反省をしていってほしい。換言すると、「教育学」というディシプリンの外から教育を左右してきた力や観念の思想的考察をもっと深めていってほしいということである¹。

現代の教育の課題にこたえる実践知を鍛えていくには、教育学のディシプリンを超えた、まさに学際的な視野が必要である、そして、今ますますそれが求められている、ということである。また、そもそも教育学はさまざまな方法論と視野を介して教育について探究する学際的な学問として成立している。

しかしその一方で、教育学に限らず、学問を成立させる外的要件は、常に社会の学問への要請、その学問の社会のなかでの位置や期待に依ってきた歴史がある。学問は常にそうした側面についての検討にさらされていなければならないとも思う。行政や政策に知見を提供するにしろ、それへの抵抗の論理を構築するにしろ、そのための研究として成立せしめられた時点で、その社会、その時代における一定の機能を学問自体が担ってしまうということである。学説史研究、学知・学問の歴史的、社会的機能を問う研究の重要性はここにある²。

今回の学際的ネットワークによって考えてみたいと思ったのは、認識か、実際の関与か、という二分法というよりも（それだけではなく）、その「あいだ」である。後述のように、議論においては様々な意見がでた。議論のなかで、このプロジェクトの趣旨を問われて、私がちらっと触れたのは、私の分野は教育学のなかでは異端視されやすい、といったことだった。補足すると、「教育学」史自体を問う、メタ「教育学」といった志向性は、上記にみたように、時間もかかるし理論をいじっているだけのよう捉えられがちで、教育（学）の世界では、なかなか理解が得にくい、また異端視される（とまではいなくても、すくなくとも役に立たないとみなされがち）というようなことである。

議論を通して改めて感じ、また気付かされたのは、そのような諦念にとどまることなく、議論をし、理解しあうということ自体が重要なのだということであった。もちろん、それぞれの方法論に則った研究の蓄積は不可欠である。そのうえで、それぞれの研究間の境界を超えた知の交流があることで、実践の場である社会現実を見る眼、それを分析しその結果を社会に還元する眼、技法を豊かにし、より現実に寄り添った実践知を鍛えることができる。こんなことは、当然のことなのかもしれない。しかし、それがなかなか困難なのである。

今回、総勢40名の学生、教員によって、そうした場が可能となったのは、上記のように茶話会から繋がる議論の場を大切にされてきた先生方、そして、今回議論のテーマを共有する場として学会シンポジウムを提案して下さった福祉社会学会大会委員長の安立先生、そしてそのシンポジストとして研究発表をされ、話題を提供いただいた上に、それに対する学生による疑問、批判を含めて書いたレポートを軸とする合同研究会で、温かくその議論を見守って下さった高野先生、皆さまの支えのおかげである。深く感謝したい。

Ⅱ. 舞 台

2010年5月30日、九州大学箱崎文系キャンパスにて開催された福祉社会学会の大会シンポジウムは、「小規模・高齢化集落（限界集落）の課題と持続可能性」というテーマで企画された。その趣旨は、以下のようにある。

人口減少社会、縮小型社会の「縮図」としての小規模・高齢化集落（限界集落）の現状と課題を確認した上で、「限界」「消滅」といった一面的な見方ではなく、農業経済的な視点では見落とされてきた生活の場としての集落を維持するために必要な方法論を検討する企画としたい。そのために、農村・地域社会学、地域福祉学等の視点からの報告をもとに、集落の維持を可能にする条件と、それらを支える具体的な方法論について検討する。

報告者

「過疎高齢者の生活構造と社会参加活動」 高野和良（九州大学）

「小規模・高齢化集落の高齢者と地域福祉—長野県泰阜村の高齢者社会調査から」
小磯明（日本文化厚生農業協同組合連合会）

「『T型集落点検』と『生活農業論』」 徳野貞雄（熊本大学）

シンポジウムの開始前に、私たちが参加させていただいている趣旨を説明し、九州大学の多分野連携の取組の宣伝と、この場を学際的議論への話題提供に使わせていただくことに感謝の意を述べる機会をいただくことができた。今日は若い人がたくさんいるから、という前提での熱い語りかけもあり、非常に意義ある会だった。

ここで、その内容を要約し、紹介することはしない。『福祉社会学研究』第8号（2011



年3月刊行予定)にそれぞれの発表を踏まえた論考の掲載が予定されている。以下の合同研究会での議論は、おそらくそれがなければわかりにくいと思う。ぜひともそちらを参照していただきたい。



このシンポジウムでの議論を踏まえ、受講生は、以下のような課題のレポートを提出、全員分のレポートを事前に配布、読んでおくことを前提に、合同研究会に臨んだ。

レポート課題

(おおよそ A 4 用紙 1 ~ 2 枚程度)

1. シンポジウムの議論を聞いて、参考になった点、より認識が深まった点はどのようなことですか。
2. 自分の考え(研究関心や方向性、問題の捉え方など)が変わった点はどこですか。
3. 違和感を感じた点、疑問に思った点、批判点はどこですか。

上記 1, 2, 3 は、3 人のシンポジストの各議論に即して、出来る限り具体的に記述してください。

4. このシンポジウムのテーマについて、自分だったらどのような方法で、また、どのような視点を重視した研究として発展させたいと思いますか。
5. 今回のシンポジウムを軸に、大学(研究)と社会との連携について考えたいと思います。それぞれのシンポジストの発表は、社会にどのように役立つと考えますか。その場合社会に役立つとはどのようなことを指していますか。

Ⅲ. 演 技

6月19日(土)13時より、教育システム専攻・社会人演習室にて合同研究会が行われた。当初の予定は2時間程度、としていたが、下記のような次第でレポートをもとに、とにかく受講生は全員発言をしてもらったために、当然のことながら大いに時間を延長し、3時間近くになってしまい、申し訳なかった。以下が、合同研究会の次第である。

1. シンポジウムについての確認と議論

- 1) 個々の発表に関して
- 2) 全体に関して
- 3) テーマの前提に関して

2. 新しい連携研究、学際研究の提案

- 1) multi-discipline のヴァリエーション
- 2) inter-discipline, integral-discipline の可能性³

3. 社会との連携とは

- 1) 社会に役立つとはどういうことか
- 2) 大学(研究者)と社会との関係はどうあるべきか
- 3) 人間と環境に働きかける技法と専門知の「あいだ」

4. 今後の連携に繋ぐ

- 1) ネット上での議論に参加しよう
- 2) 動的指導体制へのお誘い

ここでは、3時間にわたる議論を、野々村の視点からとりあえず記録しておきたいと思う。従ってももちろん全てを網羅はできないと思うので、また別途この記録への追記、修正や批判の文章を参加者(教員、学生ともに)がさらに執筆してくれることをも期待したい。それは今後の連携に繋ぐ場があるので、その機会に寄せてくださってもいいし、さらに他の場(論文集など)に発表して下さったらなお議論が進むのではないかと考えている。シンポジストの先生方が発表された研究そのものは、先にも書いた通り、『福祉社会学研究』第8号(2011年3月刊行予定)に掲載されるので、議論の場とさせていただいたオリジナルの研究については、そちらを参照いただきたい。もちろん、シンポジウムという時間の限られた場での発表をもとにした議論であり、先生方の研究を十分に踏まえたものとはいえない。その点についてお詫びしたい、と同時に、できればそれに対する議論を重ねていただけたら、より理解を深めることができ、より本質的な議論に進めるのではないかという思いがある。

1. シンポジウムについての確認と議論

本当は皆のレポートを全て共有した上で議論をしたかったのだが、時間と人数の関係上、それは読んできている、という前提で、疑問点、批判点を、まず全員が順に発表するというところから始めた。それぞれのシンポジストに対して、様々な疑問が出された。以下に箇条書きにする。

- 分析方法や論証手続きについての疑問
- 質問紙調査における項目の問題
 - 不安感を聞くということの問題
- 過疎限界集落という言葉の定義、捉え方の問題
- 市町村合併などの政策へのスタンスの取り方の問題
- 生きがい、楽しみとして農業と、雇用や収入という経済的側面の問題
- 地域での経済的循環の可能性の問題
- コミュニティの希薄化、高齢化などは農山村に特有の問題なのか
- 対策案として何を目標とするのか、という問題
 - 社会参加活動の内容はどのようなものか
 - 社会参加は必ず求められるのか、伝統を重視することの意義はなにか
 - 生きがい、楽しみとは何を意味するのか
 - 在宅ケア、他出子の支えへの要望、イエの復権は最善策なのか（家族の機能の問題）
 - 誰がそれを担うのか
 - 農山村に働きかけ、持続させるべきもの（機能）は何か
 - それは何のためなのか。誰のためなのか
 - 農山村の景観、自然環境のためか
 - 賃金労働に組み込まれない領域（シャドウ・ワーク）を重視し残存させるためか
 - 住民の幸せのためか
 - しかるべき縮小論はあり得ないのか
 - 適正な集落の規模はどのくらいか
 - 適正な食糧自給率はどのくらいか
- 集落の外との連帯、組織化の可能性、都市の関与の必要性があるのではないか
 - 福祉支援
 - 雇用、人材振興策
 - 自然環境、災害対策
- 限界を問題化する主体と理由
 - 問題化したのは研究者か、住民か、そして、なぜ問題化するのか

レジュメに出されていた論点は、まとめるとこのようになるかと思う。

議論においては、集落の内部からだけではなく、他地域からの関与、組織化を考える必要であるという意見について、その具体案を聞くことから始まった。農山村、森林の管理、自然環境の保全といった問題、すなわち人間もその一部である自然環境をいかに管理し、維持していくのかという地球規模の課題に対して、人材を農山村部に投入していかうという政府による人材振興策、あるいは農山村部への福祉やインフラ、災害対策などについての都市部・都市住民による協力などがその例である。農山村への就職（農業、林業）を伴った移住は、地域の住民同士の葛藤などを生じさせているという問題点も指摘された。

また、なぜ集落は持続させなければならないのか、それは誰のため、そして何のため、そしてどの機能が持続されるべきなのか、といった疑問点が出された。上記にあるように、それはさらに、自然の景観の維持のためなのか、住民の幸せのためなのか、ではそもそも自然の景観、自然環境を維持していく理由は何か、そして住民たちの幸せとは何か、などの問いへと広がった。

それらの問いは、農山村地域の過疎化、高齢化問題というひとつのテーマにそって、人間と環境に関する文理融合の学際的アプローチの可能性を開いたように思う。それは、ひとつには、農村、都市、そのなかでの住居やインフラ、さらに外への（外からの）移動といった空間的な視座であり、ふたつには、住民の暮らし、つまり職業生活、労働生活と地域での日常生活のありようという、人間生活、人間関係の視座である。

前者に関しては、農村をその他の地域と切り離して論じることの限界が指摘された。人間もその一部である自然環境が現在おかれている状況、マクロな視座における課題を把握する必要性である。

後者に関しては、なかでもその議論が家族（他出子との関係）に限定され対策が考えられがちなことへの疑念が出された。在宅介護は最善策なのか、という問題でもある。家族だからこそ遠慮してしまうという言葉、またバスに乗り遅れても村の誰かが乗せてくれるという安心感、それゆえの「義理」の負担の大きさ、…などの点をどう捉えるのかということにつながるだろう。近代以降の社会は、衣食住の生活、子産み、子育て、健康や医療といった生命の領域の多くを、家族をその維持管理装置とすることで成り立っている。高齢者介護のみならず、農山村地域の自然環境や生態系といった、地球規模の課題までもが、家族の問題として語られるということは何を意味するのだろうか⁴。

ここで、二つの視座を繋ぐものは、農、



食、生というテーマであるように思われる。私たちは、農や食と自分の生との関係のとり方についても、生活の様式についても、近代的効率性、合理性に飼いならされている。そのような価値観のなかで仕事をし、生計をたて、生活を送っている。そのような生活を成り立たせている枠組自体が、「限界集落」という問題群（そのように定義をすること自体も含めて）によって揺るがされている。私たち一人一人は、これからどのような生き方を選びとるべきなのか。否、その前に、私たちは、何を追究し、見極めておかなければならないのか。今後の私自身の課題としても、大いに刺激された。

2. 新しい連携研究、学際研究の提案

ここは飯嶋先生に司会をバトンタッチして進行していただいた。自分ならどのような研究として発展させたいか、という問いに対する受講生の提案は、以下の通りである。

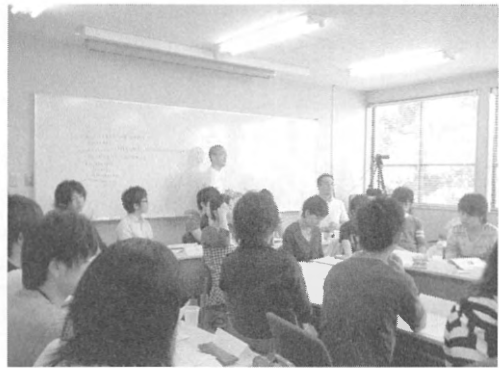
- ・他出子による寄付活動
- ・高齢者介護とジェンダーの問題
- ・行政による農業・林業の新規就業者支援体制の創出
- ・集落資源/既存ストックの活用（空家活用事業、空家バンク）
- ・コンバージョン研究から、建物が放棄された経緯についての研究へ
- ・地域集団活動（コミュニティスペース：日常生活に近いケアセンター）のための活用
- ・交通・移動研究（社会実験・福祉バス・コミュニティを活かした移動）／インフラ
- ・住民自身（若い力）による福祉や維持管理システム構築
- ・農村における兼業農家（農業の他の生きがいや楽しみのもてる職業を兼業）の可能性
- ・社会システム（法律や制度）に関する研究
- ・農村の正の部分（風光明媚、温かいコミュニティ）への注目、都市民への周知
- ・観光地化についての議論
- ・地域の人々の繋がり
- ・子どもとの関わり方の都市部との違い
- ・文化継承の実態
- ・集落の維持は何のためか、賃金労働に組み込まれないシャドウワークの領域維持の意義の一方で、多くの人々が離れていく集落を存続させる意味は何か
- ・「生きがい」「働きがい」についての哲学的問い
- ・「限界集落」の問題化のプロセス
- ・T型集落点検の結果に対する農山村の人々の反応、それに対する対応へのアプローチにより、研究者と住民の人々との関係性や違いに迫る
- ・家族という曖昧な存在、狭い世界に囲われることが農村の人々の生き方にどのような影響を与えるかを考える、「農村の人々の生き方はどうあるべきか」と考えること自

体を問う

- ・農村の「機能」はなぜ殊更に強調されるのか、農村に「機能」が見出されたのはいつで、どのように語られて現代に至ったのか、農村の「機能」に関する歴史的考察により現代の農村問題へ別のアプローチを探る

多分野連携のパンフレット説明文にも記載の通り、大きく区分すると、問題解消型と問題解決型⁵に分かれるのではないかと、それは学問領域によって区分されるのではないかと、という予想に沿って、飯島先生による議論の整理がなされた。しかし意外にも、そうとばかりとはいかなさそうだと、というところで、ひとまずまとめられた。

上記に見られるように、確かに、現在の問題を洗い出し、それを解決するためのプログラムを考案、実践へとつなげて行く志向性をもっている研究課題群と、問題とすること自体、そして課題として整理されていく際に使われる指標、分析の方法、解決策を構築する際の社会観や人間観などの価値観自体を問う研究課題群に区分できそうである。



私自身は、他者に働きかける、あるいは行動を起こすには、その方向を定める一定の価値観を前提としなければならないと考えている。それゆえに、価値観そのものがどこからくるのかを確かめなければ動き出せないという思いから、歴史という方法を選び取ったという経緯がある。どうしても、前提となる考え方がどこからきたのかを問わないままに、一步を踏み出すことには躊躇してしまうのである。すなわち、なぜ問題とされるのか、なぜ持続しなければならないのか、なぜ農村なのか、またより私自身の関心に近づけていけば、なぜここで家族が問題とされ、家族関係を緊密にすることによってその解決が試みられようとしているのか、子育てと介護がとりわけて嫁（妻）の負荷とされていることと男性独身者増加との関係が深いにも関わらず、他出子家族からのサポートを軸にできるのか、長期的スパンでは自然と人間との関係の変化や、近年の行政区画や福祉の政策によって生じた構造的問題の発生過程と、そこにおける家族関係の変化との関係はいかなるものだったのか、…などの問題群（このままではかなり散漫しているが）を問わずして先には進めない。

しかし、実はそのように書き出していくと気付くのは、シンポジストの先生方の研究課題に限りなく近づいていっているということである。研究の進展に伴って分析の手法や、それに用いる用語、解決策を論じる足場とする価値観などは、常に検討され更新されるのである。そもそも研究とはそのようなものである、そして、それこそが大学での

研究が社会に対して発信しうることであり、ということも学生さんたちのレポートにある。この点をも含め、現実への対応、実践を前にして研究がいかなる知見を提案しうるか、つまり実践知とはどうあるべきか、という問いをもって、次のセクションへと進んだ。

3. 社会との連携とは

ここでは岡先生に進行をお願いして、いよいよ大学の研究知が社会の様々な問題、現実に対してどのような還元、連携をしうるのか、社会と大学の連携とはなにか、というテーマの議論となった。受講生による意見は以下のようになった。

《行政、民間を含めた社会への発信》

- ・他の研究に対して新たな分析手法、問題のとらえ方を示す
- ・調査結果（例えば、内側の人間から見た実態）を発信する
- ・今後の社会の課題を考える契機、判断材料を与える
- ・調査結果から具体案を提案する
- ・モデルケースを提供する
- ・他地域にデータを提供する
- ・大学での調査・研究をもとに、官・民が実際の対策を練ること
- ・行政への知見の提供、ボトムアップ政策への提言
- ・大学での非営利的調査研究をもとに、その成果を実践していく
- ・政策の検討、批判

《現場への関与》

- ・実践の場にコミットする
- ・住民自身の問題意識や危機感を高めるきっかけをつくること
- ・いかに最低限度の文化的で健康的な生活を送れるか、その問題点を洗い出すこと
- ・集落が今後直面する課題の指摘、限界集落を存続させていく方法の提案
- ・多分野・多学の知見が住んでいる人にとって意味がある

《社会に役立つ、という枠組自体の再考》

- ・「社会にどのように役立つ」では社会は受け身な状態であり、私たち一人一人が社会であるなら、自分自身で考える（研究により新たな視点を見出す）ことが重要
- ・すでに在る「役立つ」に沿う方向と、新たな「役立つ」の基準を検討する方向がある
- ・研究者は何を「問題化」し、「役立つ」という判断をするのか、研究者はどこまで現場にコミットすることが可能で、妥当なのか。そのあり方、方法、深さは？

上記の最初の二つが、どちらかという先述の、現在の問題を洗い出し、それを解決するためのプログラムを考案、実践へとつなげて行く志向性であるといえる。そして三つめが、問題とするということ自体、そして課題として整理されていく際に使われる指標、分析の方法、解決策を構築する際の社会観や人間観などの価値観自体を問うているといえるだろう。

しかし、その違いは対立ではなく、補完関係でなければならないのは当然のことである。双方の知見が孤立してしまうこと自体が問題なのである。議論のなかで、大学での研究知が、いかに社会と連携しうるか、ということよりも、大学の中での連携のほうが重要なのではないか、それによって社会に還元できる知見を練り上げることができないのではないか、という意見がだされた。



それは、どのような領域、テーマであっても然りである。現実から遊離した問いも、絶えざる問いかけから隔離された現場への関与や計画立案も、どちらも実践知に結びつかない。専門知同士の交流、触発、刺激、練磨こそが、実践知構築に結びつくのだという点を確認できた。

IV. 今後へ

その後、先生方のコメント（可能であれば、参加された教員からのコメントを別途記載する場を設けたい）、さらに後期に続く「動的」指導体制、そしてIT議論の試みの紹介をし、ひとまず散会した。

今回は、6つの授業連携としたことで、合同研究会としては少し大がかりな形となった。しかし上に紹介したように、異なる専攻分野（授業参加者のなかには人環以外の学生もいた）の受講生による、ひとつのテーマに関するレポートを集結し、一つの場でそれを共有し議論の契機とできたこと、そしてそこにおいて実践知の構築過程にはまさにこのような多分野連携の場こそが重要であることを確認できたことは、今回の取組の成果といえる。

茶話会から始まったソフトな、そして自由で刺激的で楽しい議論の場は、今後も無理のない形で続けられる。

今回のプログラムに授業連携にてご協力くださった先生方、授業連携としてではないが個人としてご協力くださった先生方、そして、福祉社会学会の（当シンポジウムに関わる）関係者の先生方、そしてなにより、レポート、合同研究会での議論でこのプログ

ラムを盛り上げてくれた受講生の方々、感謝いたします。ここで確認できた「知の共同体」の重要性を大切にしながら、足元を固め、将来を見据えていきたいと考えています。

〔注〕

1. 広田照幸「社会変動と思想運動—教育思想史学会の歩みを傍観して—」『近代教育フォーラム 18号』2009年。
2. 例えば、大きな時代的な枠組みのなかでの様々な学知の歴史的機能を問うたものとして『岩波講座 帝国日本の学知』（第1巻～第8巻）岩波書店、2006年などがある。また、教育学のなかでの、優生学・優生思想の果たした機能を様々な角度から論じたものとして、藤川信夫編『教育学における優生思想の展開—歴史と展望—』勉誠出版、2008年がある。こうした学問史、学説史研究は、枚挙にいとまない。私自身が関心を抱いている性差認識に関わる生物学、医学、解剖学的知の系譜、その権力性を論じたものとしてT. ラカー『セックスの発明：性差の観念史と解剖学のアポリア』工作舎、1998年（原著1990年）の他、近代初期のイングランドを対象としたものとして以下のようなものがある。Pelling, M., *Medical Conflicts in Early Modern London: Patronage, Physicians, and Irregular Practitioners 1550-1640*, Clarendon Press, Oxford, 2003; Fessell, M. E., *Vernacular Bodies: The Politics of Reproduction in Early Modern England*, Oxford UP, 2004; King, H., *Midwifery, Obstetrics and the Rise of Gynaecology: The Uses of a Sixteenth-Century Compendium*, Ashgate Pub., 2007., etc.
3. “multi-discipline” “inter-discipline” 等の用語については、ジェフ・ゲーマン「海外機関の学際的取組に関する文献調査：『学際性の代償は絶え間ない警戒感』」（『学際白書2009 コーディネータ取組の記録』九州大学大学院 人間環境学府）。
4. M. フーコーやG. アガンベン等の「生権力」「生政治」の議論は、近代社会における生命や生活領域の問題性と、家族の位置、機能について有益な示唆を与えてくれる。「教育文化史Ⅰ」（野々村による大学院ゼミ、この多分野連携プログラムに授業連携）では、G.アガンベン『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』（以文社、2003年）を講読した。難解なアガンベンの議論をここで援用することは、今の段階では困難であるが、私としては少なくとも生身の生が政治的領域に晒され、判断の場となっているという近代社会の問題に、今回のテーマが限りなく近いものであることを認識したところである。
5. 問題解消型とは、問題化そのものを相対化すること、つまりそのような問題を問題とするような思考枠組自体を考えていく方向性であり、多分野連携のパンフレット説明文にもある認知、認識型といえるように考える。それに対して、問題解決型は、問題化にそった解決の方向性を探るという意味で、計画、開発型と言い換えられるように思う。